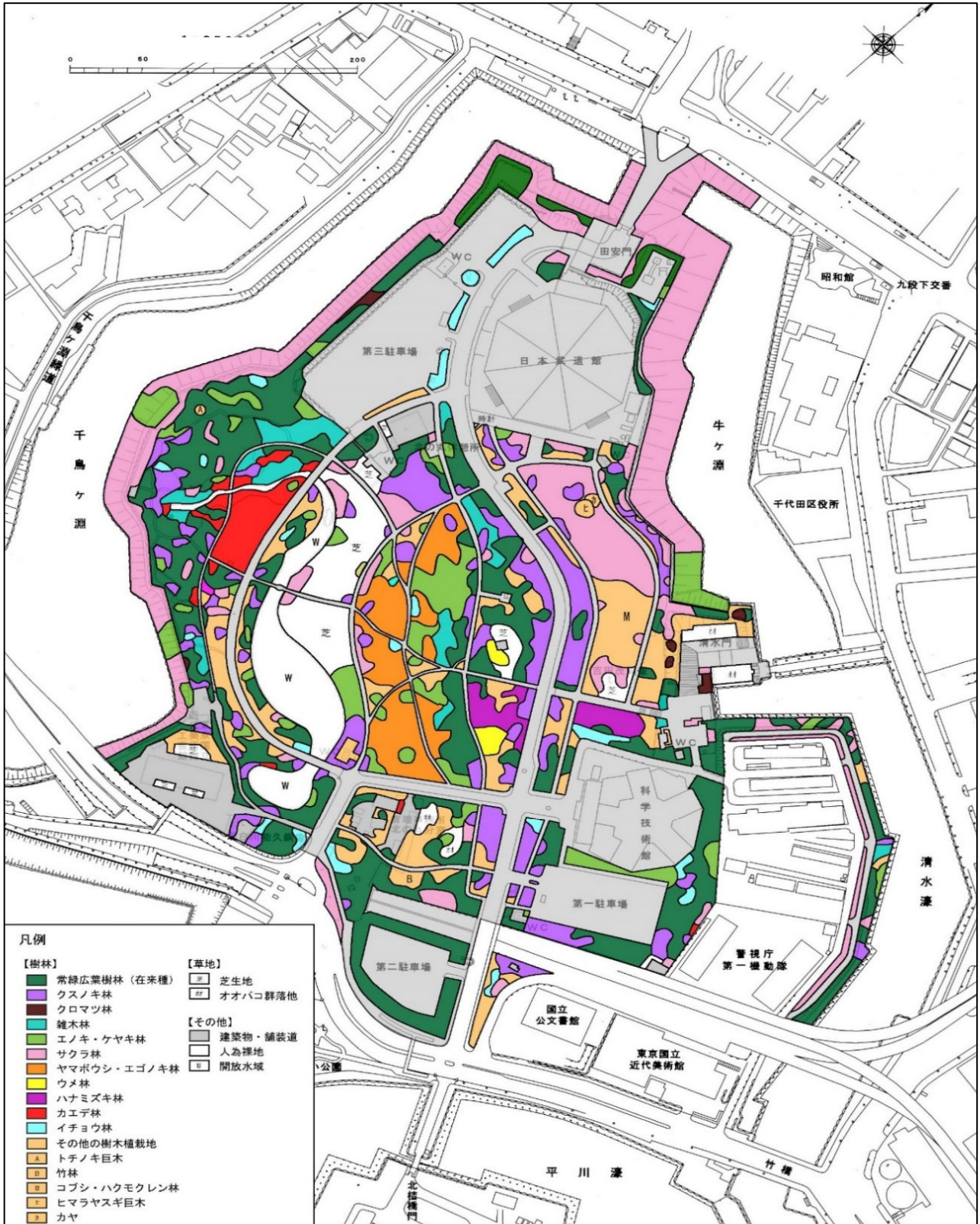


北の丸公園の利用の在り方検討会（第1回）資料より抜粋
皇居外苑・北の丸公園の概況

2. 北の丸公園の現況

(2)自然環境



平成 21 年時の植生図

①植物

- ・自生する植物は林縁や路傍を好む種が多く、森林生植物は限定されている。サクラ類等の花木が多い。
- ・都市近郊から減少しつつあるキンラン、ギンラン等が点在している。また、メハジキ、オドリコソウ等が群生している。アリアケスマレ、アオイスミレ等の在来スマレが多く、タンポポも外来種のセイヨウタンポポよりも在来のカントウタンポポが多い（公園整備時に外部から持ち込まれた土や苗木と共に侵入した可能性がある。）。
- ・一方で、都市近郊の丘陵地等に一般的なホタルブクロ、ノコンギク、シラヤマギク等が欠如している。
- ・濠端の草刈り斜面においてはニリンソウ、ジロボウエンゴサク、トリカブト類、アザミ類等が生育しており、かつての多様な植物相が温存されている可能性がある。
- ・ササ類、ヤブミョウガ等の優占箇所では林床の構成種が単調になる傾向がある。
- ・千鳥ヶ淵、牛ヶ淵とその堤塘に囲まれて樹林を中心とした静謐な植生景観が保たれ、修景に配慮した花木、紅葉木、野鳥誘致に配慮した花実木も多種類みられる。
- ・全般に植栽木の大型化による過密化、特にクスノキ、マテバシイ、イチョウ等の少数の植栽樹種の優占繁茂が顕著で、衰弱木の発生、陰鬱な林内環境などの課題も生じている。

②鳥類

- ・都市内の市街地、住宅地、樹林地に一般的な鳥類を中心とし、渡り鳥、冬鳥が加わった種構成である。
- ・キビタキ、ムギマキ、サメビタキ、コサメビタキ、ムシクイ類などの秋の渡り時に確認された鳥類も多く、渡りの中継地として重要である。
- ・公園中央部にはエゴノキ等の実のなる樹が多く、ヤマガラがよく見られる。ヤマガラは留鳥として生息している。
- ・アオジ、シロハラ等の冬季に林床で活動する鳥類が少ない。
- ・中央の池にカワセミが出現する。カイツブリが繁殖している。
- ・カラス類の集団ねぐらになっていない。夕方、皇居や東御苑方向に移動している。

③水生動物

- ・魚類は人為的移入が起源である。モツゴの個体数が多く池の中、池の上流部で多く確認されている。
- ・トウヨシノボリの個体数も多く、モツゴとともに池で繁殖している。外来肉食魚はいないが水生生物に影響を与えるコイが10頭以上生息する。
- ・甲殻類ではスジエビ、エビノコバン、アメリカザリガニも生息している。
- ・水生昆虫類はアメンボ類を除き少ない。イトトンボ類、ヤンマ類等のトンボ類の成虫

の飛翔が見られる。

④爬虫類・両生類

- ・両生類の確認種としてはアズマヒキガエルが池で繁殖し、主に樹林域で活動している。夜間、園路を歩いている個体を見る機会が多い。他に池で外来種のウシガエルが確認されたことがある。
- ・爬虫類ではカナヘビが多く、主に、樹林域や低木の植栽地（生垣等）で見られる。トカゲ、アオダイショウが確認されている。都市内で生態系上位種の生息は注目できる。ヤモリは樹木名板の裏などで多く見られ、卵も確認できる。池にはクサガメ、スッポン及び外来種のミシシippアカミミガメが生息している。

⑤昆虫類

- ・トンボ類が多くウチワヤンマ、オオヤマトンボ等の大型のトンボ類も見られる。初夏にはコシアキトンボ、夏季にはチョウトンボが各地に多い。濠を発生源とし、成熟までの期間、北の丸公園を利用しているものも多いと思われる。
- ・ノコギリクワガタ、コクワガタ、ウスバカミキリ、トビナナフシ類などの森林性の昆虫類が多く確認されている。
- ・セミ類、アオスジアゲハといった特定の昆虫類の個体数が多い。アオスジアゲハは食樹のクスノキが多いことによる。
- ・地表徘徊性のオサムシ類（ゴムシ類を含む）やシデムシ類が極端に少ない。
- ・草地性のバッタ類（ショウリョウバッタ等）も個体数は多くはない。